

令和5年度 第1回田原市まち・ひと・しごと創生連携会議 委員意見要旨 令和5年7月31開催

(1)田原市まち・ひと・しごと創生関連事業（令和4年度）の効果検証について

1 雇用の創出・就労促進

(1-1 創業支援)

- ・ 創業者の件数については増加しているが、コロナ禍を経てライフスタイルが変わり、夜遅くまで団体で飲食をするという機会が減った。
- ・ 創業者数の増加に注目しているが、今後は転廃業の数が極端に増えると言われている。それを補うためにも新規創業を積極的に支援していく必要がある。
- ・ やる気のある若手経営者が一所懸命やってくれているが、一方で良い技術を持っている高齢の方の跡を継ぐ人がいないという状況もある。
- ・ 年間宿泊者数について、今後はインバウンド等で観光客も集まってくると考えているので期待をしている。それと併せて日帰りや帰られる方の滞在時間を長くする取組も必要である。
- ・ 新たに起業された方が集まって悩みが相談できるような支援があると良い。

(1-3 農業後継者・新規就農者の確保・育成と労働力の確保)

- ・ 農業経営について、人口が減少する中で国が質より量の生産を推進しているため、農産物の安値が続いている。その上経費も上がっており、先行きが不安な中で就農も含め農業を続けていくという判断が難しい。
- ・ 新規就農者を集めるためには、受け入れ体制が用意されているということをいかにPRするかが重要である。相談相手が常にいるような仕組み等を整えなければ、仕事として農業をやることは難しい。
- ・ 後継者不足と高齢化による廃業で農業をやっている方が減っており、子どもは外に働きに出て、自分たちが高齢化したら土地を人に貸してしまう状況も人口減少の一因として取り上げていってほしい。

(1-5 観光地域づくり)(1-6 道の駅の魅力向上)

- ・ 道の駅田原めっくんはうすは、観光客も地元の方も野菜を中心に買っていく。道の駅あかばねロコステーションは、サーファーがかなり来ているが、花はあまり売れていない。道の駅伊良湖クリスタルポルトは魚介類を推したいところではあるが、土産物として取り扱いにくい。ため、近隣の魚市場のお店に誘導している。
- ・ 渥美半島は走りやすい等の理由でバイクライダーからの評価が高いため、こちらの経済効果も見逃せない。
- ・ 市内で一番の観光地である伊良湖でしっかりと観光案内ができていない。田原市の観光情報に精通した人が観光の案内をすることが必要不可欠である。
- ・ 女性視点のアイデアを生かし、それをWEBやSNSに載せると拡散力がある。魅力のあるものをインフルエンサーに届くようにすることが観光PRにおいては重要である。

2 定住・移住促進

(2-1 若者・臨海企業従事者等の市内定着・定住・移住促進)

- ・ 臨海企業従事者等の市内定着を図るためには、田原市でモノづくりをしっかりと続けることが重要である。そうすることで毎年新規の新入社員が配属でき、いずれ定着・居住と循環していく。
- ・ かつては田原市の社宅に住む人が多かったが、近年は家賃補助を使って市外に住むことを選ぶ方も多。若い人が地域の方のあたたかみを感じられる機会に参加し、田原市の良さに気

付くことが定住につながる。

- ・田原市は子育てへの支援や制度が充実しているが、その情報を知る機会が少なく、活用できずに後で知るパターンが多い。子育て情報をその世代に伝えるシステムができると良い。
- ・地域の方は情熱を持ってお祭り等の地域行事をやっているが、今は人が足りない状況である。そういった情熱や感動を感じてもらえるよう、外部の人も参加できるように門戸を広げていく考え方も必要である。
- ・最近の若い人は、社会課題の解決や伝統文化の継承、ボランティア活動のような社会貢献をしたい人が多い。
- ・ボランティア的に社会課題解決を一緒に進めていけるようなサークルがあると地域にとってもメリットになる。
- ・田原市の臨海部は世界有数の企業集積であり、技術的・販路的に見ても世界の一つの拠点である。様々な人が集まっているので、そういった方たちとマッチングをして地域課題の解決に繋がっていくようになると良い。
- ・特定技能2号の対象に農業が追加されたため、これからは家族滞在が可能になるということであったが、実際に技能実習生の数は増えているものの、田原市へ来られた方の相談をしている中ではうまくやっていけないケースが多い。歓迎するのは良いが、言葉や文化の壁を取り除くような支援体制が整っていなければ来てくれた方々が困ってしまい、結果として田原市から出ていってしまう。

3 結婚・出産支援

(3-1 結婚・出産支援)

- ・新型コロナウイルス感染症拡大の影響で婚活イベントができない状態が続いていたが、少しずつオンライン等で再開をしてきた。対面式での開催も実施したところ、応募者数もコロナ禍前よりも増加している。
- ・結婚に対する考え方の個人差が大きく、出会いの機会がない方が多いため、イベントのやり方は常に工夫してより良いものにしていく必要がある。
- ・婚活イベントの際に田原市における農家や商工業者等の一日の働き方をPRすると、結婚後の生活がイメージできるので効果的だと思う。
- ・コロナ禍を経て、コミュニケーションの取り方をはじめ、未来をイメージすることが難しいという若い人が多い。昔は暗黙知で出来たことが今はできなくなっている。
- ・子どもが多ければ多いほど養育費が大きくなり、家庭への負担も大きくなるため、子どもを増やすことを躊躇してしまうのが一番の課題である。
- ・最近の風潮で人と触れ合う機会も少なく、人との関わりがだんだん減ってきている。若い人たちが楽しく参加できる機会が増え、自分から積極的に参加するようになるのが理想的である。

4 地域の魅力・住みよさの向上

(4-4 戦略的なシティセールス)

- ・1つ1つの施策を個別で見ると、それぞれの指標を横断的にみることが必要である。
- ・今年度6月に開催されたアイアンマンレースの成功によって、世界的にこの地域がPRされたと思う。走れる地域、スポーツツーリズムで楽しめる地域であることが改めて確認できた。
- ・ナショナルサイクルルートやバイクライダーの話は、1日に数十km~100kmくらいを移動していく旅行形態になるので、田原市と周辺地域も含めて広域で情報を発信することが大変重要となってくる。
- ・渥美半島だけでなく豊橋や遠州灘も含めて、立寄りスポットや巡れる飲食店など、広域エリ

アをカバーする情報発信において、渥美半島が中心的な役割を果たすことを期待したい。

- 公共交通の移動について、市民の移動手段として確保してだけでなく、外から来る人の公共交通としての役割も重要である。
- サイクルツーリズムにおいても、豊橋鉄道渥美線がサイクルトレインとして運行しているが、伊良湖まで行く豊鉄バスをサイクルバスとして運行できれば、伊良湖岬までサイクリングで行き、伊良湖温泉に入って、帰りはサイクルバス・サイクルトレインで帰る、というプランができる。サイクリングを楽しみながら、移動を楽しく楽にできるような取り組みとして、公共事業者とも連携することも検討してほしい。
- SNSを通してまちの魅力を感じることが多い。地域の魅力PRをYouTubeやInstagram等のSNSで情報発信をすることで周知に繋がってまちの魅力も高まり、観光客の増加にも繋がる。
- 市内の企業がこれからも田原市で継続的に活動できるように、道路などの環境整備を実施していくことが大切である。
- 学校給食の無償化や高校生までの医療費無償、保育士の確保等は、子育てしやすい環境の根本であり、市民から見える取組であるため、市の特徴を生かした施策を展開してほしい。
- 高齢者が楽しく健康でいられるような場づくりが重要であり、高齢者が元気であれば医療費の削減にも関わってくる。
- 田原のお祭りに携わる人が減ってきているため、今後はさらに門戸を広げて、地区を限定せず花火が好きな人が集まってお祭りをできるようにすると交流も生まれるので良い。そこに市の支援があると、今後も安定して開催していくことができると思う。
- 今後、小中学生の終業後の活動が部活動から地域の教室や習い事へ移行していくにあたって、住んでいる地域によって習い事まで通うことが困難なところもあり格差が生まれかねない。中にはボランティアで教室やクラブをやってくれる教員もいるが、学校間の差も生じるため、なかなかうまくいかない状況である。
- 市内のスポーツ大会等で部活動としての参加が無くなると、スタッフとしての教員の協力が得られにくくなり、市の支援策が無いとやっていけない状態にある。
- (市役所) 市としても大きな問題と捉えており、何らかの支援をしていく必要があると考えている。地域の中で保護者の方がスポーツ等を教えていただいている活動もあるが、継続的に実施するのは難しいため、支援策を検討していく。
- 最近の地域活動を見ていると顔や声の繋がりが無くなっており、それが色々なところに影響しているように感じる。できる限り顔を合わせて話をして、問題を解決していくということも重要である。
- 市内の中学校を卒業した人が豊橋の高校に通う割合が増えており、市内の高校に欠員が出る。
- (市役所) 高校については所管が愛知県になるため、何らかの形で連携ができないか検討している。
- 田原市で育った子どもが市外に行ってしまうと、帰属意識がどこになるのか心配している。
- 地元の子どものが地元の高校に行くという形が理想であり、それができれば、大学で市外へ出ても地元に戻ってくるといふふるさと意識ができると思う。
- 人口減少というこれまでにないことに直面している。確実なことは「全てを総力的にやる必要があるということ」、「そのためには全体の目標を持つことと各々の枠を超えていくこと」の両方が絶対不可欠である。